

正月から「時間」を考える

八王子囲碁連盟会長 成田 滋

正月は親類一同が集まり、睦み合う月です。そして新しい年を言祝ぐ時であります。ですが、近年集まることが困難になり、スマホやパソコン上で集い合うという新しい様式が定着しました。

思うに、小さいときは元日が来るごとに1歳を加算されて呼ばれたものです。それを不思議に覚えました。昭和24年までは数え年が一般的でした。十月十日かけて生まれてきた時点で1歳ということです。理にかなっているともいえます。十月十日から、10か月という長さで10日目という一瞬に、時を実感するのは、「時の流れ」を考えさせてくれるのが正月です。

古代ギリシャでは「時刻」と「時間」を区別していました。それがギリシャ語に現れています。ギリシア語では、「時」を表す言葉として「クロノス」と「カイロス」との2つがあります。「クロノス時間」は、過去から未来へ一定速度・一定方向で機械的に流れる連続した時間を表現し、「カイロス時間」は、一瞬や人間の主観的な時間を表す、いわば内面的な時間です。



やがて西欧の哲学者が「時間」を論じていきます。ベルグソンという哲学者は、時間には「空間化された時間」と「純粋な未来の時間」があるといいます。前者は過去の出来事で分割することのできる時と主張します。時の本質を対象とするのが自然科学であるということです。科学的な認識というのは、「流れる時間」を時計によって量的に把握するという意味らしいです。他方、後者は時間とは流れとして未決定なことの持続と考え、それを扱うのが哲学であるということです。

ハイデッガーは、過去から現在、未来への連続という時間観を提案します。「創造—存在—終末的破滅—転生」といういわば輪廻という仏教観です。時計のような一瞬の時点や長さの意味での時間ではなく、過去から未来への連続という流れの時間観を強調するのです。時間と空間を絶対的なものではなく、人間の内観や感性のあり方によって変わるものであるということです。古代ギリシャ人はすでに「時刻」と「時間」の違いを理解していたのです。驚くべき洞察です。